

## 低学年向け中小企業インターンシップ参加者の追跡調査 —早期のインターンシップ体験が与える影響についての考察—

松坂暢浩（山形大学 学術研究院（基盤教育院））

### 1. はじめに

本稿は、山形大学基盤教育の授業で開講している低学年向け中小企業インターンシップ履修者の追跡調査の報告である。低学年次のインターンシップ体験が、その後どのような影響を与えていたかを明らかにすることを目的としている。開講初年度（平成26年度）の学生を対象に、高学年次（3年生）のインターンシップ参加に繋がっていたか、またその後の大学生活や進路選択などに影響があったか検証を行った。

### 2. 本授業の概要

本授業は、低学年（主に1年生）を対象に事前・事後指導を含む短期のインターンシップ（3日間）に参加する授業である。インターンシップ経験と内省の機会を提供することは、働くとは何かを考え、自己の適性や志向の理解、業界の理解など基礎的なキャリア教育に繋がると指摘されており、それらは特に低学年次から提供することが望ましいという提言がある（エティック, 2013: 経済同友会, 2015）。また中小企業のインターンシップは、学生のキャリア教育上きわめて有用であるとする指摘（大田, 2005）がある。これらの点を踏まえ、本授業では、低学年（主に1年生）を対象に、受入企業先を中小企業に限定している。なかでも受入企業は、人材育成に理解と関心が高く、想いをもって地域でビジネスを行っている経営者が多く加盟しており、本学と平成22年より連携協力協定を結んでいる山形県中小企業家同友会の加盟企業に事務局を通して依頼している（図1）。

本授業の目的は、本学の教育目的に則り、インターンシップを通じて、学習意欲と就職に対する意識を一段と高め、実社会で必要とされる職業意識、自立心と責任感を育成し、実践する能力を早期から育成すること。そして、本授業を本格的なインターン

シップ参加前のプレ体験と位置付けていることから、高学年以降のインターンシップ参加に繋げることを目的としている。

本授業の目標は、インターンシップ体験を踏まえて、働くことはどのようなことかを自分の言葉で説明できることを目標としている。また、中小企業への理解を深めること、山形で働く魅力を感じてもらうことも併せて目指している。

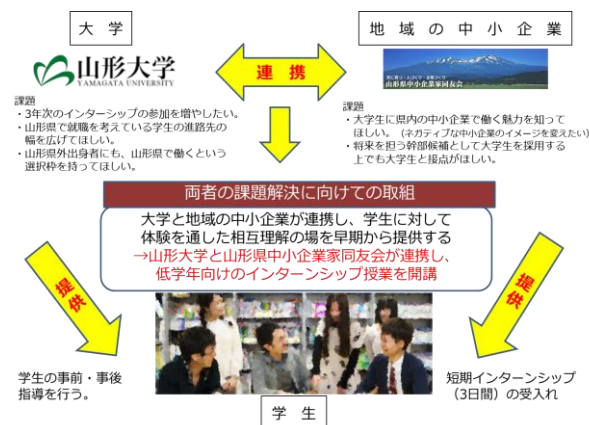


図1) 本授業の全体イメージ

本授業のスケジュールは、事前指導（ビジネスマナー講座、応募書類の作成、中小企業研究会など）を隔週で行った上で、インターンシップ（3日間）に参加し、参加後に学生および受入企業を招いた成果報告会を開催する流れで実施している。また隔週の開講であることから、授業以外の時間を利用しての個別面談や、できるだけきめ細やかなサポートができるように専用のウェブサイト（サイボウズLIVE）を立ち上げ、連絡や情報共有を定期的に行っている（図2）。

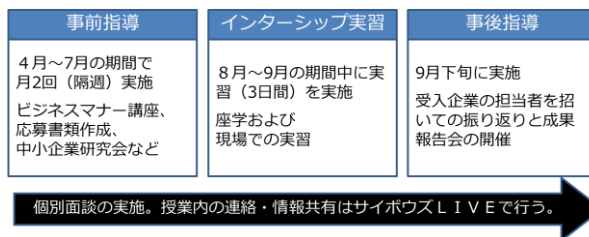


図2) 本授業のスケジュール

受入先のマッチングは、業界や仕事に対する視野を広げる観点から、学生の希望は取らず担当教員が学生の居住地から通いやすい企業をピックアップし、マッチングを行っている。

本授業の履修学生数および受入企業数（3年間）は、初年度の平成26年度は、20名の学生を13事業所に派遣した。2年目の平成27年度は、28名の学生を18事業所に派遣している（表1）。また受入企業の業種は、サービス業、卸売業、印刷業など幅広い業種の受入先となっている。履修学生も、様々な学部からの履修があり、山形県外出身者も多いことから、山形県の中小企業を広く知ってもらう機会になっているものと考えられる。

表1) 受入企業と履修学生の推移

		平成26年度	平成27年度	平成28年度
受入事業所数		13	18	19
履修学生数		20	28	34
所属	人文学部	9	5	9
	理学部	2	3	3
	工学部	2	5	5
	農学部	4	11	1
	地域教育文化学部	3	4	16
性別	男性	9	18	11
	女性	11	10	23
文理	文系	12	9	25
	理系	8	19	9
出身	山形県出身者	6	5	12
	山形県外出身者	14	23	22

### 3. 調査の目的

開講初年度に履修した学生が、本授業で目指していた次年次以降の本格的な中長期インターンシップに参加を予定しているかについて、また低学年次のインターンシップ体験が、その後の学修や課外活動、

進路選択などに影響を与えているかを検証することを目的に追跡調査を実施した。

### 4. 調査方法

平成26年度履修者20名に対して、平成28年7月中旬に記名式のアンケートをウェブサイトより行った。調査項目には、名前、学部、3年次のインターンシップ参加有無とその理由、1年次のインターンシップの参加による考え方や行動の変化（①学習、②課外活動、③アルバイト、④進路・就職、⑤社会人基礎力、⑥社会への関心度、⑦中小企業への就職の7点）について尋ねた。また心理尺度として、「キャリア意識の発達に関する効果測定テスト（キャリア・アクション・ビジョン・テスト：CAVT）」（下村ら,2009）を使用し、キャリア意識について調査を行った。

### 5. 調査結果

#### 5-1 回答者の基本属性（表2）

平成26年度履修者20名のなかで、回答を得られたのは14名であった。性別は、男性6名、女性8名であった。所属学部は、人文学部7名、地域教育文化学部3名、理学部2名、工学部1名、農学部1名であり、文理で分類すると文系10名、理系4名であった。出身県は、山形県出身者5名、山形県外出身者9名であった。3年次にインターンシップ参加を予定している学生は7名という結果であった。参加予定者の応募形態は、大学経由の応募（5日間以上）が5名、就職情報サイト等の経由または企業等に直接申し込む者（5日間未満）が2名であった。

表2) 回答結果（性別、所属学部、文理、出身県、3年次のインターンシップ申込有無、参加者の応募形態）

性別	人数	割合(%)	文理	人数	割合(%)	3年次のインターネット参加有無	人数	割合(%)
男性	6	43	文系	10	71	参加する	7	50
女性	8	57	理系	4	29	参加しない	7	50
学部	人数	割合(%)	出身地	人数	割合(%)	参加すると回答した者インターンシップ応募形態	人数	割合(%)
人文学部	7	50	秋田県	1	7	大学経由の応募(5日間以上)	5	71
地域教育文化学部	3	21	山形県	5	36	就職情報サイト等を經由または企業等に直接申し込む者(5日間未満)	2	29
理学部	2	14	宮城県	5	36			
工学部	1	7	福島県	1	7			
農学部	1	7	新潟県	1	7			
			長野県	1	7			
			山形県内出身	5	36			
			山形県外出身	9	64			

### 5-2 低学年次のインターシップ体験による 考え方や行動の変化 (表3)

低学年次のインターンシップ体験が、現在の自分自身の考え方や行動に変化を与えているか、学習意欲など7項目それぞれについて「全くその通り」から「全くそうでない」の5つの選択肢から1つを選ぶことを求めた。また7項目以外である場合は、自由記述を設けて回答を求めた。その結果、③アルバイト、④進路・就職、⑤社会人基礎力、⑦中小企業への就職の4項目について、影響があると回答した学生（「全くその通り」と「ややその通り」を選択した学生の合計）がそれぞれ11名（79%）おり、学習への影響があると回答した学生は9名（64%）であった。

表3) 低学年次のインターンシップ体験による考え方や行動の変化

項目	質問	影響があったと回答した人数	割合 (%)
学習	大学での勉強に対して意欲的に取組むようになった	9	64
課外活動	課外活動(サークルや部活、ボランティアなど)に対して意欲的に取組むようになった	6	43
アルバイト	アルバイトに対して意欲的に取組むようになった	11	79
進路・就職	就職や進学など卒業後の進路を選択する活動への意欲的に取組むようになった	11	79
社会人基礎力	社会で必要と考えられる能力(社会人基礎力)を高めたいと思ふ行動するようになった	11	79
社会への関心度	経済・社会の出来事に以前より関心を持つようになった	8	57
中小企業への就職	地方の中小企業で働くこともいいなと思うようになった	11	79

注1: 影響があった回答者とは、選択枠で「全くその通り」と「その通り」を選択した者の合計人数。

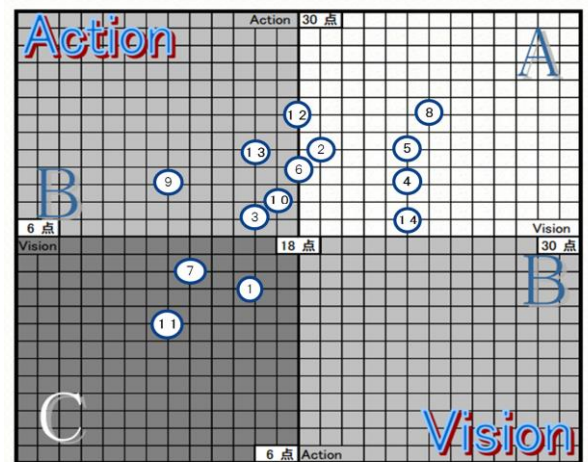
その他、あなたの考え方や行動に変化があった内容(自由記述)	
当時は、準社員として会社に入ってもらったことが初めてだったので、自分のマナーには常に気を配り、肩肘を張った振る舞いをしていた。しかし、社員の皆様がかなりフランクに接してくれたことに大変驚き、気が抜けたことを覚えている。働くというのは自分らしさを完全に抑え込み、接するすべての相手に、いわゆる営業モードでやり通すことと思ひ込みがあったのだが、それは少し違うのではと思うようになった。	
自分の欠点、改善点を見つめ直す機会が増えました。あと、他人の立場に立つと考えることを始めました。	
大企業や名前が有名な企業以外にも目を向けるようになった。むしろ、目立たない企業の方へ注目するようになった	

### 5-3 キャリア意識の発達に関する効果測定 テスト (CAVT) の結果

大学生の就職活動に必要な力を、アクション (Action) とヴィジョン (Vision) との2つの側面から捉える12項目それぞれについて「かなりでき

ている」から「できていない」の5つの選択肢から1つを選ぶことを求め、「アクション」得点と「ヴィジョン」得点を集計した。そのうえで、回答者ごとに得点結果をプロットシートに書き写し確認した。今回の集計にあたり、「アクション」得点と「ヴィジョン」得点が19点以上を【Aゾーン】としてカウントし、それ以外は、【Bゾーン】、【Cゾーン】としてカウントした。

以下、集計結果と各ゾーンの学生の傾向を見ていきたい (図3、表4)。



○ 平成28年度の結果 (3年次の結果) ※枠内の数字は学生に振り分け番号 (14名分)

図3) CAVT集計結果

表4) 各ゾーンの学生傾向

ゾーン	人数	割合 (%)	就職希望 (人)	院進学希望 (人)	その他 (人)	インターシップ参加予定 (人)	インターシップ不参加 (人)	学生No
Aゾーン	5	36	5	0	0	3	2	2 4 5 8 14
Bゾーン	6	43	3	3	0	2	4	3 6 9 10 12 13
Cゾーン	3	21	2	0	1	2	1	1 7 11

「アクション」得点とも「ヴィジョン」得点も高い【Aゾーン】の5名の学生は、全員が就職希望であった。5名のうちインターシップ参加を予定している学生が3名、インターシップ不参加の学生が2名であった。インターシップ不参加の学生2名は、2年次にインターシップに参加していた学生が1名、教員志望でインターシップではなく教育実習に参加予定の学生が1名であった。

「アクション」得点が「ヴィジョン」得点の一方が高く、もう一方は低い状態【Bゾーン】の6名の

学生は、全員「アクション」得点は高いが、「ヴィジョン」得点が低い傾向があった。また 6 名のうち 3 名は就職希望、3 名は大学院進学を希望している学生であった。インターシップに参加を予定している学生が 2 名、インターシップ不参加の学生が 4 名であった。インターシップ不参加の学生 4 名は、インターシップには参加せず、課外活動（サークル）に力を入れて活動したいと考えている学生が 1 名、大学院進学のためインターシップの参加を考えていない学生が 3 名であった。

「アクション」得点も「ヴィジョン」得点も両方低い【Cゾーン】の 3 名の学生のうち、2 名は就職希望で、インターシップの参加も予定している学生であった。残り 1 名は就職もインターシップ参加も考えていない学生であった。

## 6. 考察

調査結果を踏まえて、本授業の目的としていた低学年次にインターンシップを体験することで、①高学年次のインターンシップ参加に繋がっていたか、②その後の大学生活や進路選択などに影響を与えていたかの 2 点について改めて考察していきたい（図 4）。

### 6-1 高学年次のインターンシップ参加への繋がり

3 年次にインターンシップ参加を予定している学生は 7 名であった。また 3 年次はインターンシップに参加しないが 2 年次にインターンシップ参加していた学生が 1 名いた。このことから、高学年次のインターンシップ参加に繋がっていた学生は、回答者 14 名のうち 8 名（57%）であったことが分かった。

また、参加理由についての回答を見ると、「1 年生のインターンシップを経験することにより、インターンシップに参加することへのハードルが下がり 3 年生で参加しやすくなりました。」というコメントが挙げられていた。低学年次にインターンシップを体験することで、再度インターンシップへ参加する際の抵抗感がやわらぎ、参加がしやすくなる効果があると考えられる。

インターシップ参加予定学生の CAVT の結果を

見ると、インターシップに参加を考えている学生のうち、【Aゾーン】の学生が 3 名、【Bゾーン】の学生が 2 名、【Cゾーン】の学生が 2 名であった。このことから、インターシップの参加に繋がっているが、参加予定者のなかでキャリア意識に差がある点に注意が必要であると言える。今後、特に【Bゾーン】と【Cゾーン】の学生に対して、より将来をイメージしながらインターシップに参加するように働きかける必要があると考える。

次に、インターシップ不参加の 7 名についてみていきたい。不参加の理由についての回答を見ると、

「大学院進学を考えているからです。」「教員の道を考えています。」など教員志望や院進学希望の者が 3 名、「2 年生のインターンで公務員と議員インターンシップに行き、もう十分だと思ったから。」という理由から 3 年次の参加を考えていない者が 1 名、「1 年生のインターンシップ経験をあまり有意義なものと思えなかったから。」という理由を挙げる者が 1 名いた。1 年次に参加したインターンシップの内容が、インターシップそのものに対するネガティブな印象を持たせてしまったことで、参加を見合わせる学生が 1 名いる点は見逃せない。この学生に話を聞くと、まずプログラムが単純作業中心だった。また、ずっとお客様扱いされ、何のためのインターンシップか分からなくなったと語っていた。今後このような影響を与えないよう、インターシップのプログラム内容の改善が必要であると考ええる。

インターシップ不参加学生の CAVT の結果を見ると、【Aゾーン】と【Bゾーン】にいる学生が、回答者 14 名のうち 6 名（43%）いた。彼らは、大学院進学、教員志望、課外活動に力を入れているなど目標を持って行動している学生であった。新たにインターンシップの参加を考えていないからと言って、決してキャリア意識は低いとは言えない。この点に関して、インターシップに何度も参加することがそもそも必要かという議論と併せて、今後詳細に分析する必要があると考える。

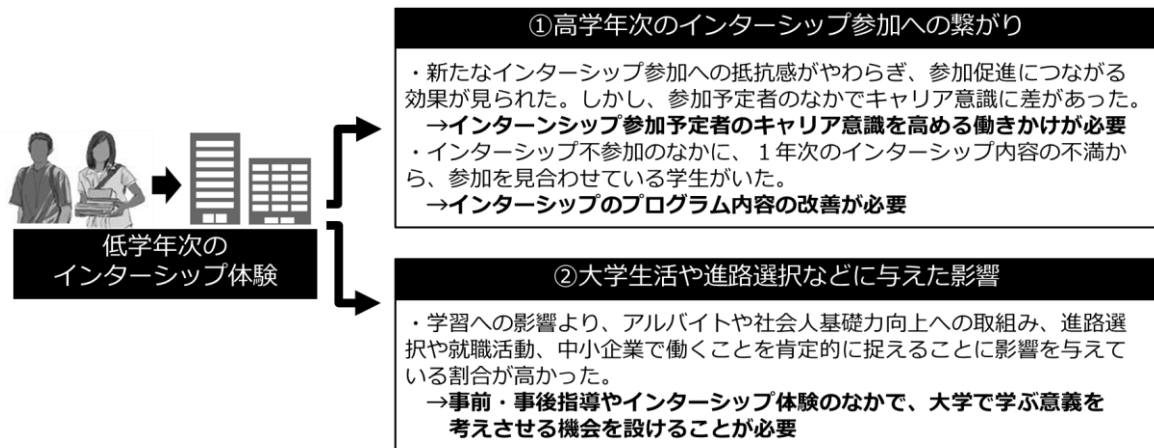


図4) 調査結果を踏まえた考察のまとめ

## 6-2 大学生生活や進路選択などに与えた影響

低学年次のインターンシップ体験が、本授業で目標としていた学習へ影響を与えていた割合（64%）より、アルバイトや社会人基礎力向上への取組み、

進路選択や就職活動、中小企業で働くことを肯定的に捉えることに影響を与えていた割合（79%）が高いことが明らかになった。

また他にどのような考え方や行動に影響があったかを尋ねたところ、「自分の欠点、改善点を見つめ直す機会になったから」、「大企業や名前が有名な企業以外にも目を向けるようになった」などのコメントがあり、自己理解や企業理解の促進にも影響を与えていることが分かった。

本授業は、各学生が所属する学部の専門性と強く結びついたインターンシップではないため、学習への影響は限定的であった可能性がある。しかし、低学年次のインターンシップを通して学習意欲向上に繋げるためには、事前・事後学習やインターンシップ体験なかで、大学で学ぶことの意義を考えさせる機会を設けていく必要があると考える。

## 7. 本研究の課題

今回、3年次のインターンシップに繋がらなかった学生が7名いた。今後3年次以降の参加を促進させていくために、不参加の要因について、不参加者へのインタビュー調査による質的な調査・分析を行っていききたい。

そして、低学年次のインターンシップ体験が、大学生活や進路選択などに与える影響について、本授業の目標に挙げていた学習への影響が限定的であった。この点に関して、インターンシップ参加後の学習意欲を高めるために、学習に影響があった学生の分析を深め、そのメカニズムを明らかにして行きたい。

また、本調査が3年次のインターンシップ参加申込時点の調査であることから、実際に参加した後での調査ができていない。また4年次以降の就職活動にどのような影響があったについても検証できていない。今後継続的に調査を行っていく予定である。

## 付記

本稿は、筆者が2016年9月4日（日）に行った日本インターンシップ学会第17回研究大会（於目白大学）における「低学年を対象とした「短期中小企業インターンシップ」の追跡調査」の報告内容を基に加筆修正したものである。

## 参考文献

- 特定非営利活動法人エティック（2013）「産学連携によるインターンシップのあり方に関する調査」  
URL:[http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/houkokusyo\\_H24FY\\_internship.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/houkokusyo_H24FY_internship.pdf)（2017年1月31日現在）
- 太田和夫（2005）「中小企業におけるインターンシップの有効性と今後の促進策」『インターンシップ研究年報』（8）pp8-21
- 下村英雄・八幡成美・梅崎修・田澤実（2009）

- 「大学生のキャリアガイダンスの効果測定用テスト  
の開発」『キャリアデザイン研究』(5) pp127-139.  
日本インターシップ学会関東支部監修 折戸晴雄他  
編 (2015)『インターシップ入門 就活力・仕事力  
を身につける』玉川大学出版部, 東京
- 日本インターシップ学会東日本支部監修 折戸晴雄  
他 編 (2017)『インターシップ実践ガイド 大学と  
企業の連携』玉川大学出版部
- 松坂暢浩 (2016)「低学年を対象とした「短期中小  
企業インターンシップ」の追跡調査」 第 17 回日  
本インターシップ学会研究大会 配布資料
- 文部科学省 (2016)「インターンシップの拡大に向け  
た施策について」  
URL:[http://www.jasso.go.jp/gakusei/career/event/workshop/\\_icsFiles/afieldfile/2016/04/28/2H27WS\\_monnkasyou.pdf](http://www.jasso.go.jp/gakusei/career/event/workshop/_icsFiles/afieldfile/2016/04/28/2H27WS_monnkasyou.pdf) (2017 年 1 月 31 日現在)
- 文部科学省 (2016)「インターンシップ好事例集  
-教育効果を高める工夫 17 選-」  
URL:[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/icsFiles/afieldfile/2016/10/07/1355719\\_001\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/icsFiles/afieldfile/2016/10/07/1355719_001_1.pdf) (2017 年 1 月 31 日現在)
- 山形大学 (2014)「平成 26 年度文部科学省大学改革  
推進事業産業界のニーズに対応した教育改善・充  
実体制整備事業 -産官学連携による地域・社会  
の未来を拓く人材の育成- 成果報告書」